

学 位 論 文 題 名

プラトン初期対話篇におけるソクラテスの倫理思想

学位論文内容の要旨

はじめに

プラトンの描き出すソクラテスは、一方では正義の徳を何よりも重視し、いかなる場合でも決して不正を行わないという行動原理を確信的に信奉する。こうしたソクラテスは、『ソクラテスの弁明』『クリトン』『ゴルギアス』に現れる。他方、他の対話篇では、幸福が最高の価値として捉えられ、我々はどうすれば幸福を手に入れることができるかをめぐって展開される。そこにあるのは、正義ではなく幸福を究極的な価値とし、それを獲得するための道具として知恵を追い求めるという図式である。本論文は、前者の観点から上述の対立を解消し、統一的で整合的なソクラテス倫理説の再構成を試みる。

第一部 ソクラテス・正義・神

『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、『ゴルギアス』を中心にして、ソクラテスの倫理思想の整合的な再構成を試みる。

第1章 ソクラテスの行為規範

『クリトン』と『ソクラテスの弁明』において展開される正義基底の倫理の実相を解明する。さらに、これら二つの対話篇において、一般に想定されている矛盾、つまり国法の絶対視と神重視の姿勢との対立は存在しないこと、ソクラテスの倫理は神を根本原理とし、神との関係において正義の在り方を求めようとすることを明らかにする。

第2章 理性と神

神を基本とする正義基底の倫理は理性との関係を論ずる。ソクラテスの倫理的確信の源泉は理性、デルフォイの神託、ダイモニオンの三つにあるが、理性と神的啓示は調和的に理解される。

第3章 神と狂気 — 『イオン』における吟誦詩人批判 —

ソクラテスには、人間が神的狂気に陥ることによって真理を獲得するという思想は存在しない。むしろ、神的狂気はロゴスに反するものとして批判される。ソクラテスに対する神の介入は、ダイモニオンや神託など、これとは異なった仕方なされる。

第4章 正義と快 — 『ゴルギアス』に即して —

従来の標準的解釈では、ソクラテスによるカリクレス批判を快楽主義批判と見る点までは正しかったが、カリクレスを利他的快楽主義者とのみ理解したために、ソクラテスの立場は長期的快楽を視野に入れて利他的快楽を克服するものであると誤解し、ソクラテスを功利主義的快楽主義

者に仕立てしまった。しかし、ソクラテスの批判の射程は広くカリクレス個人を越えて、快楽主義=欲望充足主義一般に向けられていると見なければならない。カリクレスにとって、「節度」とは諸欲求間の均衡的調和を意味し、知性は快の最大化を目的として諸欲求間の調整と均衡を計る計算能力として理解された。これに対して、ソクラテスにとって「徳」は長期的利益としての「幸福」を実現するための道具ではない。知性は事物に固有の善さを把握する能力であり、「節度」とはこの知識に基づいて欲求を抑制することに他ならない。このように、ソクラテス自身の倫理的原理は、快楽主義とは無縁の「正義」という原理に求められるのである。

第5章 正義と幸福

ソクラテスの「有徳な人間はそれ自身で幸福である」という教説においても、「幸福」は「正義」と密接不可分の関係にある。この点に関しては、「徳を身につけた人は、その結果として幸福な状態に至る」という解釈が有力である。徳とは、様々な欲求の対立を調整して行為に整合的な目的を与え、幸福達成の過程で生じる阻害要因を排除する技術知に他ならない、というのである。しかし、ソクラテスは価値の多元性を否定しないし、幸福を個々の満足の総体と同一視することもしない。幸福の核心には、自己の生のあり方全体に対する評価が含まれ、個々の行為のもたらす満足はこの種の評価と密接な関連をもつ。すなわち、自分の生に対する満足は、自分の生全体のもつ秩序と統一性を不可欠の前提条件とする。したがって、「徳の十分性」の教説は、功利主義的観点ではなく、「秩序」と「正義」という観点から理解されなければならない。

第6章 「無知の知」と「愛智(フィロソフィア)」

従来、「無知の知」は、知を所有した状態に対して不完全な状態と見なされ、無知を克服し知を獲得することによって、本当の意味で倫理的に行為できると考えられる傾向が強かった。しかし、「無知の知」は人間から誤った善の理解を取り除くことによって、本来の善の方向に向かわせる肯定的な知である。事実、ソクラテスは「不正を行う者はそれ自体で不幸である」ということが本当であるかどうかを知らないと告白する。人間に可能な知は個々の行為の指針となる知であり、自分にとって何が本当の利益であり、本当の幸福であるかに関わる知をもつことができない。このような徳と幸福とを統一する究極的な善に関わる知は、神のみがもつことのできる知である。このように、「無知の知」は神と幸福の問題と密接な関係を持ち、それがソクラテスの愛智活動全体を動機づけている。

第二部 ソクラテスによる愛智(フィロソフィア)の実践

『プロタゴラス』、『ラケス』、『カルミデス』における対話の展開に即して、ソクラテスの功利主義的倫理説批判を解明する。

第7章 『プロタゴラス』におけるソフィスト的主知主義批判

徳の教師を自認するプロタゴラスは「正義」「節度」「敬虔」という市民的徳を、ポリス市民がすべて平等に所有することを認めると同時に、エリートのために「知恵」「勇気」という競争的徳を別個に設定し、ここに自己の徳の教師としての立場を確保しようとした。プロタゴラスのこのような立場は『テアイテトス』の人間尺度論とも整合的である。すなわち、プロタゴラスは各個人の思いなしをすべて真と認め、同時に知恵と無知の区別が存在すると主張する。知恵は真

偽の領域ではなく、善悪の価値判断の領域に成立するからである。プロタゴラスは感覚の立ち現れの背後に、その立ち現れを成立させる包括的な客観的システムを想定している。これは、対象(α)－感覚の立ち現れ(β)－感覚者の状態(γ)という三項によって構成されるが、各個人が(β)のみに関わるのに対して、知者はこのシステム全体に関わることによって知恵を成立させる。各個人にはこうした相関関係に関わる知識(技術知)が欠けており、これなしに善悪の判断は不可能だからである。この意味で、個人は知者の支配下にある。したがって、従来のプロタゴラス像は全面的に修正する必要がある。プロタゴラスの本質は、個人間に相対性を生み出す包括システムを想定し、これに関わる知識に基づいて各個人の立ち現れを支配するところにある。

さらに、プロタゴラスは快楽主義的人間理解に基づいて「勇気」を「怖れに関するリスク計算」として理解していること、またプロタゴラスの知恵の実体は諸価値の共約性に基づく快苦の計量術にあり、それは同時に大衆操作の術にほかならないことが明らかにされる。計量術とは、各個人の快苦の立ち現れに長期的な視野から価値評価を下す技術知に他ならない。要するに、プロタゴラス説は現代の功利主義に匹敵する内実をもつ。むろん、このような主知主義的枠組みをソクラテスに帰すことはできない。『プロタゴラス』は「無知の知」の文脈にあり、対話相手の誤った考え方を浮かび上がらせ、その無知を悟らせるための作品である。

第8章 『ラケス』における勇気と知

「勇気」に関するラケスの「思慮を伴った忍耐強さ」という定義だけではなく、ニキアスの「恐ろしいことと平気なことについての知識」という定義も、ともに技術的知識に依存するがゆえに、ソクラテスによって論駁される。これら二つの主知主義的定義は対話の相手の考えであり、ソクラテスはそれらの批判を通して「無知の知」と「魂への配慮」を目指す。

第9章 『カルミデス』における自己知と節度

クリティアスの「知識の知識」という「節度」の定義は、知識のある者と無知な者を選別し、人々を適材適所に配置し、これによって正しさに導かれる世界を作ることとする。すなわち、「節度のある者」は国家の支配者として想定されている。しかし、このようなクリティアスの見解はソクラテスによってアポリアへ追い込まれる。すなわち、この対話篇はクリティアスの「汝自身を知れ」に対する独自の解釈に基づく「無知識の知識」を主題とすることによって、ソクラテス自身の「無知の知」に新たな照明を与えようとする試みである。

あとがき

一般には、プラトン哲学はソクラテスの歩みからの離反であるとされている。しかし、『饗宴』や『パイドン』に見られる中期対話篇におけるプラトン哲学は、ソクラテスが「無知の知」として示した人間精神と善との関わりをめぐる問題設定と非常に近いところで展開されている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 坂 井 昭 宏
副 査 教 授 新 田 孝 彦
副 査 助 教 授 千 葉 恵

学 位 論 文 題 名

プラトン初期対話篇におけるソクラテスの倫理思想

プラトン初期対話篇におけるソクラテス像には相矛盾する二つの面が見られ、これがソクラテスの倫理思想の統一的理解を困難にしてきた。すなわち、一方でソクラテスは正義の徳を何よりも重視し、快楽の追求が厳しく退けられるとともに、神を尊ぶ敬虔な生き方を追い求める。これを中澤氏は「正義基底の倫理」と呼ぶ。他方、ソクラテスは善や幸福についての自分の無知を告白し、行動よりも知恵を目ざす探求者である。ここには、「徳は知なり」という主知主義者ソクラテスの姿が浮かび上がるが、この立場は「主知主義的幸福主義」と呼ばれる。この相反する二つの側面を整合的に解釈し、独自のソクラテス像を再構成することが本研究の目的である。

さて、中澤氏の本論文における功績は、第一に従来の解釈でソクラテスに帰せられて主知主義的幸福主義の倫理説が、彼の論争相手の学説であり、彼自身の倫理的な立場は正義基底の倫理であるという独自の見解を提示したことにある。この点に関しては、おそらく多くの反論を呼び起こすものと思われるが、これが中澤氏の独自の解釈であることに間違いはない。

この点は、『ゴルギアス』における快楽主義批判にもっとも顕著である。この対話篇はプラトン初期の最大の作品であるが、中澤氏はもっとも難解な登場人物カリクレスに焦点を当て、「節度」を「正義」と「快」との関係で解明しようと試みる。従来の標準的解釈では、ソクラテスによるカリクレス批判を快楽主義批判と見る点までは正当であったが、カリクレスを刹那的快楽主義者とのみ理解したために、ソクラテスの意図は長期的快楽を視野に入れて刹那的快楽を克服することにあると誤解し、ソクラテスを功利主義的快楽主義者に仕立ててしまった。しかし、カリクレスは快楽主義者・専制君主的支配者（カリクレスⅠ）であると同時に、権力志向のエリート主義者・大衆迎合主義者（カリクレスⅡ）でもある。したがって、ソクラテスの批判の射程は広くカリクレス個人を越えて、快楽主義=欲望充足主義一般に向けられていると見なければならない。カリクレスにとって、「節度」とは諸欲求間の均衡的調和を意味し、知性は快の最大化を目的として諸欲求間の調整と均衡を計る計算能力として理解された。これに対して、ソクラテスにとって「徳」は長期的利益としての「幸福」を実現するための道具ではない。知性は事物に固有

の善さを把握する能力であり、「節度」とはこの知識に基づいて欲求を抑制することに他ならない。このように、ソクラテス自身の倫理的原理は、快楽主義とは無縁の「正義」という原理に求められるのである。(第1部第4章)

第二に、これは本論文の目的と表裏一体の関係にあるが、当時のアテナイの民主政を背景にソフィストとその武器である弁論術の真の姿を明確に描き出した点にある。この意味で、本論文は現代の標準的ソクラテス解釈の基底をなす功利主義に対する批判であると同時に、その弁論術批判と訴訟社会批判を媒介にして現代社会批判に及ぶ可能性を秘めている。これは中澤氏の『プロタゴラス』解釈に見て取ることができる。

徳の教師を自認するプロタゴラスは「正義」「節度」「敬虔」という市民的徳を、ポリス市民がすべて平等に所有することを認めると同時に、エリートのために「知恵」「勇気」という競争的徳を別個に設定し、ここに自己の徳の教師としての立場を確保しようとした。プロタゴラスのこのような立場は『テアイテトス』の人間尺度論とも整合的である。すなわち、プロタゴラスは各個人の思いなしをすべて真と認め、同時に知恵と無知の区別が存在すると主張する。知恵は真偽の領域ではなく、善悪の価値判断の領域に成立するからである。さらに、プロタゴラスは快楽主義的人間理解に基づいて「勇気」を「怖れに関するリスク計算」として理解し、また彼の知恵の実体は諸価値の共約性に基づく快苦の計量術にあり、それは同時に大衆操作の術でもある。計量術とは、各個人の快苦の立ち現れに長期的な視野から価値評価を下す技術知に他ならないからである。要するに、プロタゴラス説は現代の功利主義に匹敵する内実をもつ。むろん、このような主知主義的枠組みをソクラテスに帰すことはできない。『プロタゴラス』は「無知の知」の文脈にあり、対話相手の誤った考え方を浮かび上がらせ、その無知を悟らせるための作品なのである。(第2部第7章)

第三に、これは本論文の方法論に関わるが、ソクラテス初期対話篇に関する現在の研究成果の批判的摂取に基づいて、それらの錯綜した筋立てを説得的な仕方では解明した点も、本論文の重要な功績に数えることができる。

他方、プロタゴラスの人間尺度論を「包括理論」の一部として位置づけることは、その認識説としての独自の重要性を過小評価することにならないかという批判もある。また、本論文はソクラテスをロゴスによって真理を追及する愛智者と、どこまでも敬虔に神を敬い神とともに生きる信仰者という二つの側面を合わせもつ一つの独自の人格として描き出すことに成功しているが、ソクラテスの倫理説の規範倫理的な位置づけについては、それが正義基底であることを除いて、必ずしも十分な論述がなされていない。

このような問題は残されるが、本論文はテキスト読解の緻密さ、文献の幅広い渉猟と適切な引用、独自の整合的解釈の提示という点において十分に評価に値すると判断される。以上のような理由に基づいて、本審査委員会は全員一致で本学位申請論文が博士(文学)を授与するにふさわしいという結論に達した。